

紹介

宮座の研究

肥後和男著

曩に東京文理科大学記要の一編として「近江に於ける宮座の研究」を公にし、滋賀縣下各村々の神社を中心として存在する神事組合に就いてその組織や行事を調査し、その我國村落社會の歴史の上に有する大いなる意義を究明せられた肥後和男氏は、今回更にその後の調査にかゝる京都奈良大阪兵庫等諸府縣に於ける同種の事例を基に考察を新にして「宮座の研究」を著はされた。前著が宮座一般の本質究明を目的としつゝ、なほ一部資料報告書の態を脱しなかつたに對し、今回の著書は一層多數の資料を取扱ひながら、それらの單なる集積に留せず、よくその要を摘んでこれを論旨の中に取入れ以て宮座全般の歴史的考察を成遂げてゐる。即ちその内容を目次を以て簡明に示せば、序説（宮座研究の意義とその歴史）、第一編 宮座の意義と分布、第二編 宮座の組織、第三編 宮座の行事、第四編 宮座の財政、後説（宮座の起源とその變遷）以上叙述の順序に於いても、またその論旨の大意に於いても大むね前著に相違するところはないが、新なる資料によつて多くの事例を加へ考察を確實ならしめたこといふまでもない。

想ふに宮座の問題は氏以前に於ても早く一部民俗學者の注意するところであり、殊に中世商工業者の座の起源や本質が問題となるや屢々引合に出されたところであるが、從來の論者の例證とするところは大概二三の特殊な神社多くは郡誌、村誌等を涉獵して漸く寓目するところに限られてゐたに對し、氏の研究は組織的方法を以て廣範なる地域を網羅的に調査した結果を基とするものであつて、それには學術振興會の援助と多數門下の協力があつたといへ、我々はまづそこにこの書の何よりの強味を認めなければならぬ。併しながらこの書はさきにもいふ如く單なる資料の集蒐整理につきるものではなく、著者の豊富な歴史觀と強靱な思索とによつて貫かれてゐるところにこそその特色を認めることが出来る。座の中心をなすところの當座やおとな（尉）の起源を考へてこれを令の制度に於ける寮の頭や衛門府の尉に歸し、また座の年頭行事たる行ひや神事（しうし）を説いて上古の寺院の修正會に由來するものとし、共に我國の文化が常に中央に發して漸次地方民衆に及ぶ向下性ともいふべきものを有する事實を證するものと論ずる如きはその一例であつて、かやうな解釋はその論證になほ精細な文獻的研究を必要とするであらうが、その示唆するところはひとり宮座の問題にとゞまらず廣く國史一般の理解の上に關係するところ多いであらう。而して同じくかゝる廣き立場より一層多く問題となるのは蓋し宮座の起源論であらう。人々が列座して神を祭る習俗そのものは勿論太古に遡りうるであらうが、それが眞に神事組合としての現在の宮座につながるものであるかどうか

それは氏子中特定の家のみが祭祀の特権を有してゐる所謂株座なるものと、氏子或は村民の全部が一様に座に與る村座なるものと、そのいづれを以て宮座本来の形と考へるかの問題と關聯して容易に決し難いところである。著者は前著以來株座を以て宮座の本體とする従來の通説を斥けて、むしろ村座のそれに先んじて存すべきことを説かうとされてゐるやうであるが、これはなほ今後多くの吟味を必要とするものであらうと思はれる。筆者はなほこれら起源論から離れて宮座が共同勞働組合としての「ゆひ」や「もやひ」華儀組合としての無常講、乃至近世法制的秩序としての五人組等我國村落に古來存する他の組織と如何に相關係するか、その現状とその歴史如何といふが如き問題のなほ全く遺されてゐることを思ふ。要するにこの書は學界に於ける宿題の解決の故にはなくむしろ新なる問題と資料を提示したところにその高き價值を買はるべきものであらう。(A5判、五八七頁、東京弘文堂發行、定價六圓八十錢)(樂田)

尊皇論發達史

三 上 參 次 著

明治維新の宏業が漸くその緒に就いた時、我が國は早くも開國進取の國是を中外に闡明して、それより後政治・社會・學問・思想・藝術等、諸般文化に互つて急激に歐米諸國の風を攝取するに至つた。されば幕末における熾烈なる尊皇攘夷運動が明治維新の

重要な因由をなしてゐるにも拘らず、明治時代の初期にはこれが一層高次の展開は始く見られることなく、又これに對する歴史的反省も多く加へられることなくして經過した。従つて當時歴史書としては大日本史・日本外史等が世上に流布したに過ぎない有様であつた。然るに明治維新の宏業が漸く成り、我が國は中央集權的統一國家としての新しい政治活動を開始しようとする時機に際して、一面には當時の歐洲における史學研究の一傾向、即ち史料の蒐集整理と考證主義の學風に影響せられ、且つ江戸時代以來盛んになつた考證の風と合致して、ここに漸く新しい修史事業が企圖せられるに至つた。而して斯かる事實の根柢には、實に總ての事象が一定の時間的秩序を以て發展し來つた跡を正確に知り、以て國運の進展に貢獻するといふ意味を強く持つてゐる。國史の成跡を最も正確な最も多數の史料を集積することに依つて深く理解し、更にそのことに依つて未來の發展に貢獻せんとする意識が強く働いてゐる。斯くの如き性質は明治時代の如き國家意識の昂騰せる時代において當然來るべきものであつた。

斯くて明治時代前期においては、文明史的方法が隆盛を極めると同時に、一方には東京帝國大學を中心とする考證的史學が着々その基礎を固めてゐた。即ち博く史料を採訪すると共に、史料の價值に就いて嚴止なる批判を加へ、正確なる史料のみを統合して所謂客觀的な正確な事實、有りの儘の歴史事實を再現しようといふ主張に立つて、史實の究明に顯著な業績を擧げるに至つた。

東京帝國大學名譽教授三上參次博士は、斯くの如き我が國史